

早大商学部を卒業した宇都宮氏は一九七八年、山一証券に入社する。

証券会社を選んだのは、三年もトップ営業マンとして鳴らせば、金融の知識はあらかた身に付くと考えたからだ。営業が厳しいのは知っていたが、覚悟はできていた。その後は自力で何か事業を始めたいという漠とした思いもあった。

当時は二度の石油ショックの間の時期で就職戦線は超氷河期。同級生の中にはせつせと優を取って都市銀行を目指す者も多かった。だが早稲田では学費値上げ反対闘争でろくに試験もない。それで優をもらって何になるのかと思った。しかも四年生だった七七年は企業倒産が相次ぎ、十月には安宅産業が伊藤忠商事と合併した。巨大組織も安泰で

創徳企業情報社長 宇都宮 徳治氏

二度とないドラマ ②

はないと感じていた。行くつと、副社長、副会長を大企業への幻想はなかったが、ソニーやホンダなど戦後生まれながら世界に雄飛した企業の成長神話には強い関心があった。ダイナミックに変わっていく会社の経営にプロとして関与できる職業に就きたい。しかも時代は直接金融に向かいそうだった。そう考えると証券会社がうってつけだった。実は私は野村証券からも内定をもらっていた。野村の本社に面接試験を受けに

行くと、副社長、副会長を務めた伊藤正則さんがしわくちゃの新聞を片手に質問をする。中東情勢の記事に目をやって「君、中東をどくぞろい。山一では灰皿はあ

社内でも話題になった。野村と山一は雰囲気が出るで違う。野村では面接を待つ間、大講堂でみんなタバコをすばすば吸い、猛者も誰も吸わず温厚な感じだった。私は肌合いだけで山一に決めた。

同期で入社したのは百五十七人だった。卒業前の三月中旬から千葉県船橋市の研修センターに缶詰めになり、株式とは、債券とはなんぞやと講義を受けた。

金融知識求め山一へ

私は札幌への配属を希望していた。



札幌はいろいろ遊べそうなのが魅力だった(右が宇都宮氏)

仕事人

秘録

とっさに優良可のろい遊べそうなのが魅力を上から順に並べた。競争率が高かったと富士山のようならしく、人事から「旭川か末広がりになると思函館はどうか」と言われたいつき、「私は山一が、「ネオンが暗いのは苦に適任です。なぜな手です」と言つと、同期二らば成績は山一の人とともに札幌支店への配属が済んだ。

型。底堅い」と答え 五月の連休明けに同期に出た。この返答は後 歳空港に飛び立った。支店に「山一の求める人 であいつを済ませ、独身材」を取り上げた週 寮に荷物を放り込み、三人 刊誌の記事になり、 でスキノに繰り出した。